

## ドクターインタビュー

## 藤岡 雅司(ふじおか まさし)先生

ふじおか小児科院長

今回は大阪府富田林市でご開業の藤岡雅司先生に、子供たちの予防接種についてお話を伺ってきました。藤岡先生は現在、日本外来小児科学会会長をお務めで、その他にも様々な小児科領域で広くご尽力を頂いております。また「NPO法人VPDを知って、子どもを守ろうの会」副理事長もお務めで、子供たちの強い味方の先生でした。

～先生は小児の予防接種についてとてもご造詣が深いとお聞きしております。予防接種の目的や子供たちへの必要性をお聞かせ頂けますでしょうか？～

風邪をひいたり下痢をしたり、子供たちは色々な病気に罹りながらたくましく成長していきますが、病気の中には重症になりやすいものもあります。元気に治ればまだ良いのですが、時には命を落とす事や後遺症を残してしまう事もあります。このような病気は、子供たちの健やかな育ちを目指す上では大きく危険なハードルです。重症になりやすい病気や治療法のない病気のいくつかについては予防接種があります。予防接種を受けていれば、その病気に罹らないか、罹っても軽く済む事が出来ます。また、まわりにいる人へ病気をうつすことも少なくなります。最初の二つは予防接種を受けた人が得られるメリットで、これを「個人免疫」と呼びます。予防接種を受けた人が、ワクチンで防げる病気から守られるという事で当然のことです。一方、三つ目は予防接種を受けた人のまわりにいる人、すなわち家族や友人などにとってのメリットです。これを「集団免疫」と呼びます。予防接種をきちんと受けて自分が病気に罹りにくくなれば、他の人にうつすことも少なくなります。多くの人が予防接種を受ければ地域での病気の流行が無くなります。そうすると予防接種を受けていない人もワクチンで防げる病気から守られるのです。

～「生ワクチンと不活化ワクチン」「定期接種と任意接種」などよく聞きますが、詳しくお教え頂けますでしょうか～

予防接種に用いる薬剤をワクチンと呼びます。ワクチンには「生ワクチン」と「不活化ワクチン」という大きく二つの種類があり、また「定期接種」と「任意接種」という二つの区分があります。生ワクチンとは、病気の原因となるウイルスや細菌など病原体の毒性を病気が起こらない程度に弱めたものです。その病気に軽く罹った様な状態になるので自然に罹ると同じような免疫をつけることが出来ます。通常は1回接種ですが予防する病気によっては2回以上の接種が必要なものもあります。ロタウイルス、BCG、MR(麻疹・風疹)、水痘、おたふくかぜなどが生ワクチンです。一方、不活化ワクチンとは免疫をつける力は残しつつ、病原体の毒性を完全に無くしてしまったものです。複数回の接種が必要ですが、その病気に罹った様な状態にはなりませんので、より安全に免疫をつけることが出来ます。B型肝炎、ヒブ、小児用肺炎球菌、四種混合(百日せき・ジフテリア・破傷風・ポリオ)、日本脳炎、インフルエンザなどです。「定期接種」とは、予防接種法という法律で接種について決められているものです。多くは市町村から接種の連絡がきて大抵は公費、言い換えれば無料で受けられます。但し市町村に実施する責任があるので、かかりつけの小児科のある場所が住んでいる市町村と違うと費用がかかる事もあります。ヒブ、小児用肺炎球菌、四種混合、BCG、MR、水痘、日本脳炎、二種混合(ジフテリア・破傷風)などが「定期接種」です。「任意接種」とは、予防接種法での取決めのないものです。「任意」という名前ですが、病気の重さには定期接種と任意接種で違いはありません。むしろ子供にとって必要な予防接種でも、国の怠慢で、任意接種のままになっているものも少なくありません。たいていは全額有料ですが一部は公費で受けられるものもあります。ロタウイルス、おたふくかぜ、B型肝炎、A型肝炎などが任意接種です。

～予防接種を受ける時の注意点はありますか？またアトピーなどアレルギーがある子供たちの場合は、如何でしょう～

予防接種は子供の体調の良い時に受けるというのが大原則です。しかし予防接種に用いられるワクチンは、それこそ世界中で一番多く使われている薬です。先進国だけでなく生活環境や栄養状態の十分でない途上国の子供たちにも使わなくてはならないので非常に安全に作られています。ですから少々の風邪や下痢などの軽い状態では殆どの場合、問題無く接種する事が出来ます。予防接種を受けると、接種した所が赤くなる、腫れる、痛くなる事や熱を出す、ブツブツが出る、痙攣を起こす、という様な副反応を起こす事があります。この中にはワクチンと関係がある場合(本当の副反応)も関係がない場合(ニセの副反応、紛れ込み)もあります。でも、これを区別するのはなかなか難しいのです。副反応には、よく起こるけれど大した事のないものと、めったに起こる事はないけれど重いものがあります。大したことのない副反応には接種部位の赤み、腫れ、痛みや発熱がありますが何もせずに数日で無くなってしまいます。予防接種による発熱ならむしろ安心です。他の重い病気の最初の症状という訳では無いからです。重い副反応には、片腕全体が腫れる、痙攣やアナフィラキシー反応などがありますが、幸いな事に数十万回から百万回に1回程度と言われています。アレルギーのある人で問



藤岡 雅司(ふじおか まさし)先生のプロフィール

1984年 大阪市立大学医学部卒業  
1984年 大阪市立大学医学部付属病院小児科研修  
1990年 大阪市立大学大学院医学研究科(小児科学専攻) 修了  
1990年 宝生会PL 病院小児科入職  
1996年 ふじおか小児科開院、現在に至る

日本外来小児科学会会長(2014年)  
日本小児科医会代議員、日本小児科学会代議員  
大阪小児科医会副会長、富田林医師会理事  
NPO 法人VPD を知って、子どもを守ろうの会副理事長

題になるのは、ワクチンに含まれる成分によって引き起こされるアレルギー反応であり、その最重症タイプがアナフィラキシーです。ワクチンの成分には、病気の予防に必要なウイルスや細菌に由来する成分とワクチンを安全に製造・使用するために必要な防腐剤、安定剤、抗生物質などがあります。ワクチンの成分によって重症のアナフィラキシーを起こした事があれば、そのワクチンの接種を受ける事は出来ません。但し軽いアレルギー反応程度であれば、医師がより注意して接種するという事になっています。いずれにせよ、お子さんの普段からの様子をよく知っている、かかりつけの小児科医で予防接種を受ける事が大切です。かかりつけの小児科医であれば、お子さんにとって、ベストの選択を考えて提案してくれます。不必要に接種を延期したり控えたりする事や、逆に無理な接種をする事が少なくなりますので、お子さんにとってのメリットも大きく安心して安全に予防接種を受けて頂く事が出来ます。

～日頃、診察室から見られた今の子供について何か感じる事はありますか？～

子供たちを取り巻く環境や社会状況は、私自身が小児科医になった30年前と比べて、さらには開業してからの18年間でも大きく変わって来ています。子供の数が少なくなっているという事は日々の診療でも実感していますが、子育てに関する事は、より複雑、多様になって来ている様に思います。少子化だからという訳では無いのですが、全ての子供をより大切に育てることが社会に求められています。その意味でも、いまだに任意接種のままとなっているB型肝炎やおたふくかぜ、ロタウイルスワクチンを出るだけ早く定期接種にしてもらいたいと思います。子供の病気では乳児の予防接種の種類が増えて、本当に子供の感染症は減って来ていると感じます。水痘や麻疹などを診たことのない小児科医が増えたらいいなと思っています。

～最後に保護者の方々に一言お願いします～

ワクチンで防げる病気は、子供の罹る病気のうちほんの一部に過ぎませんが、子供たちの命や健康に大きな影響を及ぼす病気ばかりです。きちんと予防接種を受ける事によって、子供たちをこのような病気から守る事が出来ます。また、地域社会には色々な人がいて一緒に生活しています。赤ちゃんやお年寄り、妊娠している女性、体に重い病気を持っている人など、体力の落ちた抵抗力の弱い人も少なくありません。実はこのような人にこそ予防接種が必要なのですが、年齢や体調によっては予防接種を受けたくても受けられない事もあります。このような人たちがワクチンで防げる病気から守るためにも、地域ぐるみの予防接種が必要なのです。保護者の方々と同じように、私たち小児科医は、すべてのお子さんの健やかな成長を願っています。お子さんたちの輝かしい未来を保障するため、ぜひ予防接種を受けさせて上げて下さい。

～本日は貴重なお話、ありがとうございました。～